

それぞれに反対声明を出すなど、反対の声を上げた。八月に発覚した『はだしのゲン』の小中学校図書館における閲覧制限問題も十分に憂鬱な出来事だった。二〇一三年は子どもの本に携わる者として危機感を抱かずにはいられない年であったと言えるだろう。

二〇一三年を想起する顔として、アニメーション監督宮崎駿と「アンパンマン」の作者やなせたかしのお二人をあげておきたい。九月の「引退会見」で語られた「子どもたちには「この世は生きるに値するんだ」ということを伝えるのが、自分たちの仕事の根幹になければならない」という宮崎の言葉に、共感を示す子どもの本関係者は多かった。一〇月一三日には、やなせたかしさんが亡くなった。享年九四歳。アンパンマンのメッセージが改めて注目された。このお二人の明快なメッセージから翻って、児童文学はどういうメッセージを発信したのだろうかと考える。

### ままならない人生

本誌二〇一三年一一一二月号の創作時評で、井上征剛が「かなえられなかった夢を抱えて」と題して『アサギをよぶ声』（森川成美 偕成社）と『かさねちゃんにきいてみな』（有沢佳映 講談社）を論じている。「これらの作品は、私たちがこの世の中で出会うさまざまな失望を抱えながら、あるいは絶望を見据えながら、社会と向き合って生きていく支えになってくれるだろう」と。『かさねちゃんにきい

てみな』は、かさねちゃんが班長を務める登校班のほぼ登校中の様子だけで出来ている作品だ。語り手は、五年男子の副班長ユッキー。かさねちゃんの卒業後、班長としてやっていく自信がまるでない。そんなユッキーにかさねちゃんは言うのだ。「傷つけられる準備ができています」から「そんなにショックじゃない」「バッチこいみたいな」と。井上の指摘は当たっていると思う。その観点を得て、さらに複数の作品に、同様の世界観、人生観が見えてきた。

『アサギをよぶ声』は高学年向き日本古代風ファンタジー。主人公の少女アサギは努力も報われず戦士にはなれない。同じく森川の『くものちゅいえこ』（PHP研究所）は、佐竹美保の絵がキュートな幼年向け作品だが、井上の指摘がより鮮明に読み取れる。くもの女の子ちゅいえこは、とても丁寧にきれいな網をかけるのだが、それを二度も失う。しかし、作品は「（でも いいんだ）と ちゅいえこはうなずきましたー気にするな、また かけりゃ いいじゃないか、かけるたびに じょうずに なるんだからな。という 扇風機の ことばを 思い出しながら。」と終わる。話が込み入りすぎという難点はあるが、『星空点呼』（嘉成晴香 朝日学生新聞社）は、事故死、けがによる野球人生の断念、家の事情による進学断念——と、まさに失望を抱え込むことが中心テーマの作品だった。

夢が叶わない、大事なものを失う——でも、終わりじゃ